明治二十一年一月十四日發兌

# 以良都女

第七號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

# 例言

本誌の目的は婦人の職分を全くし、令徳を進め、及び地位を高むるにあり。家政の欄には一家を調理すべき方法を載せ、姫鑑には令徳を進むべき佳話、實傳を載せ、雜錄には美術に關する事項或は交際の心得を載せて優美高尚の風を養ふべく、その他時時の要報及び評論を掲ぐるものなり。

# いらつめ第七號目次


いらつめ。　新年を祝そ。

姫かゞみ。　ふくさづゝみ第四回。まながれつと第二回の下。原かね子傳。

家政要錄。　西洋婦人家内の實況。小兒の育て方。清潔法。保健食料。

講　義。　美術の話。

文藝美術。　和文を學ぶ捷徑。新形の花かんざし。婦人の手紙認樣。唱歌。(初春の湖。はるのあけほの。新年。)

學　藝。　食鹽の効用。最も湯の出易き急須。樹木を見て地質を識る。

叢　話。　仇を恩。裏店の女房。

批　評。　詩人の春。肺病養生法。西洋女大學。戰場の花。

月　報。

色刷附錄。　新年唱歌音譜付

# いらつめ第七號

## いらつめ

### 新年を祝す

明治の聖代も早廿余り一年を重ねぬ。市街を散歩して世間の有様を窺へば緑の門松紅の旭旗相映じて門前に立ち並ぶハ自から新年の吉祥を示し童女の與に樂んで街路に戯るゝハ宛がら年の始の愛度を表し祝賀酬答往來恰かも人もて布を織るか如く和氣何となく世上に靄然たるハ習慣の然らしむる所か抑も外に其因縁あるかを知らざれども兎に角愛で度ものハ新年の始なり。

回顧すれバ明治廿年は女子の教育婦人の地位に少なからざるの進歩を現ハしたる年にして　皇后宮の御思召書ハ國母の尊きに在らせられて忝なくも世の人の妻たり人の母たるものを憐ませらるゝの最も深きを示し婦人慈善會の開會ハ貴婦人令嬢の窮孤を憐み癈疾を救助し愈〻進んで女子たるものゝ本分を盡さんとするの勇氣と熱心とを顯ハし其他婦人に關する美事良績固より少なからずと雖とも取分け目覺ましかりしは女子の教育に關する雑誌の増加せしと是なり。蓋し本紙いらつめは昨年七月始めて其初號を刊行してより以來貴女紳士諸君の賛成と大方の愛顧とに依り愈〻進んで其主義を擴張するに怠らず。女學雑誌ハ前々年より引續き刊行し昨年に至りても社運増〻隆盛を極め貴女の友も發刊日猶淺しと雖とも已に大に大方の愛顧を得たり。女學叢誌は廢刊して貴女の友に合せりと雖とも女學の世界より之を見れば得る所失ふ所を償ひて猶は余ありと云ふ可し。此の如く女教雑誌の續々世に出で各〻其長所を以て女子の教育を勸むるは誠に世の爲に賀す可きことにて此勢にて數年を經ば女子の有様に目覺ましき改良を見るハ敢て架空の想像には非さるべし。左れば余儕の新年を祝するハ新年の全く舊年と異ならんことを祈るに非ず新年の舊年と同しく婦人の有様に一層の進歩を現ハさんことを祈るなり否新年の舊年と同一の方向に嚮て一層目覺ましく長足を展ばさんことを祈るなり。

余儕ハ空しく想像を懐て徒に有まじきことを希ふものに非ず、余儕ハ先つ隗より始めんとするものなり。本紙いらつめハ客年七月始めて初號を發兌して以來幸に大方の愛讀を辱うし本紙の主義ハ學士淑女の賛成を蒙むり社中の喜實に望外に出でたり。是に於てか増〻記事を精選し論旨を精確にし女子

よ關する新説異聞を網羅せんとし先つ其一着歩として本年の初刷より体裁を改良し字數を増加し記事ハ愈〻精確なるを選むの歩を叹て以て聊か大方の愛顧よ答へんとせり。余儕ハ已に新年を祝す余儕ハ新年の愈女學の上よ著しき進歩を現はさんとを希ひ併せて淑女諸君の健康を祈る。諸君も亦幸よ本紙の改良を賛成し本紙の繁盛を祈り露よ倍するの厚眷を賜はらバ社中一同の喜賀に之に過ぐべからざるなり。

# 姫かゞみ

## ふくさづゝみ　第四回

美妙齋主人

直子ハ家へ歸つて直よ其日の子細を其父親に話したと見えて其日の薄昏にハはや其父親ハ直子と一途よつれだッて診察よ來て色々よ力を附けてくれた。妾たちハたゞ手を合もせて拜むより外に有難さを言出せず、其日から藥取よ妾が行くと其度よ結搆な滋養になるものを呉れ、其間よも直子が學校へ通ふ途次朝夕かならず立寄ッて安否を尋ねたり、またハむさくろしいのをも厭もせず看病まで爲てくれた。其度毎よ病人も涙を流して喜び「是から本復いたしました上も決して御宅の方へ足をも向けて寐ません」と口つゞけに言ッて居るばかり。神經の刺戟もあッて氣を引立たせたので藥もよく利き、思ッたよりも直るのが早く、三週間ほどの後よハ起きて散歩するやうになッた。是も全く那の人たちの御陰と思へバ言ふも言はれぬほど嬉しくて、どうしたら此御恩が復せやうかと今度も皆其様なことを語草にしはじめた。人の顔さへ見れバ妾達も直子の慈善を知らせずには居られず、前に馬鹿にした隣近所の者にも故意と吹聴したり何か爲て居たから自然それが新聞紙の探訪者の耳にも入ッたと見えて、直子が妾たちを救ッた顛末が遺漏なく其新聞紙に出ると、そ〻諸方の慈善家から又妾の家へ救卹金が出て來るやら、直子の事を聞きに來る人があるやら、嬉しいやら、忙がしいやら、もう〳〵其時も大層な騒擾になッた。

其内に父親も大概全快したので妾と一途に先今迄の御禮をたゞ申述べるまでに直子の家へ行き、御新造にも御目にかゝッて、命を救はれた恩をも言はうとしても流石に先立つものハ涙ばかりで、やさしい言を言はれても涙やさしい顔を見ても涙。たゞ平伏をより外の事も無かッた。

「けれど思ッたより早く御全快なそッて何より結搆で厶います。阿直、御前も始終御氣の毒だと言ッて御出でだに斯う御

壯健に御爲んなすッたのを見たら嘸うれしいだらうねエ」。

「もう、それは何程で厶いましやうか。何が嬉しいとて是ほどの事は厶いません。阿園さん、貴娘も是から折角御介抱なさいませ。御病氣のあッた跡が猶肝心ですからねエ」。

けれど妾は胸がせまッて「はい」といふ返辭を出したばかりであッた。妾の父親は僅に顏をもたげた。

「御若いのに……斯う申しては失禮ですが……御慈悲深くて……決してもう老父も忘れません、あのむさくろしい處へ御出でなすッて看病迄して下すッた事をば決して。忘ては……罰が……」

御新造はそれを打消して、

「もう、貴君そんな事は……却ッて仰られて御愧かしう厶いますよ。何、貴君、婦人といふものはやがて夫をも持ち、子供をも育てるもの。それでなくて三日も濡らさず、たゞの御孃さまでおッて御覽なさい、危急な折に臨んでは何うすることも出來は爲ません。ですから處女の内に看病の法などによく習れて居なくてはと毎でも申して居りますのです。阿直が御看病いたしましたのはつまり言はゞその稽古ですものを……決して左樣な御心配には及びません。阿直、さぞ御前もまだ習れないから下手であッたらうと思へば本當に妾も可笑いよ」。

言ッたまゝ莞爾と笑へば直子も嬉しさうに笑を含んで、

「心ばかりは如此如彼と思ひましても薩張旨く行きませんで……やゝ……未熟な處だけは御勘弁なさいませ」。

否どういたーして勿体無い」。

此處へ先生も來たので、それから馳走も出て色々な話がはじまるにつけても今日の天地は全で嬉しさで練上げた物のやうに思はれた。斯うも家内の人が慈悲深いのは實に珍らしいことで、それも全く御新造が賢いからの事であッた。

扨それから諸方の人々から惠まれた金高は中々澤山あッたのでそれをば切めての志ばかりに直子の方へ納めやうと思ッたが、先生も御新造も聞入れず、それを資本に何なりと活計の道を立てろと言ふので仕方無く受納め、其年の秋の頃からぼつ／＼商賣を爲始めたが、是も全く直子たちの御蔭もあり、一つは直子の德を表すため、また一は諸方の慈善家に御禮を言ふため、其趣を詳細に書記して開業の前に廣告した。其爲だらう、開業の當日から店の繁昌は目のまはるほどで、そーして近所の仝業は目を圓くした。其間日に一度はかならず妾たち親子の内の一人が直子の家へ安否を問ひに行き、用事でもあれば何時までゝも骨を吝まず働いてそれを助けるのを切めての

志にして居るので先方もまたいよ〳〵厚く交はッてくれ、勿体ないが直子と妾との間柄は實の姉妹のやうになり、直子から書物を借りて讀んだり、直子から英語を敎はッたり、傍の人が見ては羨むほどになッた。
次の年直子は學校を首尾よく卒業したが、年齢はやうやく十九歳、いとゞ美しくなッて來た。はや是からは世界の學校へ出る身分となッたと思ッて諸方から緣談を言込む口も櫛の歯を挽くやうでもあッたが、まだ經驗も無い、年若の身がどうして一家の妻君になれるものかと直子も言へば親御も仝意で体よく諸方を言延ばして、それからも自宅で家政と醫學とを一心に勉強して隙さへあれば妾の家へも來て色々な話をして樂しく其日を過ぐして居る内に爰に一つ直子のために困ッたことが出來たと云ふのは外でもなく宮雄とかいふ、猫の啼聲のやうな名の人が直子を是非もらひ受けたいと言込んだことで、是は全く直子の慈善を見込んだのであッた。全体最初を言はなくては分解らぬが何でも此宮雄の親の某甲は直子の父親に一方ならぬ恩を掛けて置いたとのことで、それから後を此兩家では親しく交はり、殊に宮雄と直子とは幼馴染で氣質もよく合ひ、二人とも終に一度も顔を赤めあッたことさへ無かッたほど交情も好かッた。それゆゑ今度の緣談は十分に纏まるだろうと人も思へば自分も思ッて而して如此言込んだ。處が直子は之を拒んだ。
何故直子が拒んだか。それには宮雄の人品が必用だ。宮雄は醜い人であッたか。醜いどころか大層に美しかッた。意地のわるい人であッたか。些しも意地は歹くなくむしろ温順にすぎた程であッた。惡い遺傳でも持ッて居たか。些しもそんな物をば持たず潔白な身であッた。慈善を好まぬ吝嗇であッたか。些しも吝嗇では無くて、中々の散財者であッた。學藝を持ッて居なかッたか。けれど官立學校を卒業した學者であッた。不道德な人であッたか。そんな噂も聞えなかッた。それを直子が斷然拒んだ。啻に直子ばかりでなく親たちまでもまた拒んだ。
其處には四個の原因が有ッた。第一、宮雄の体の質が全く直子のと仝じであッたこと。第二、宮雄が直子を望んだのは只直子の慈善心を愛でたばかりで其處へ昔の恩義を械にかけたこと。第三、宮雄の年齢はまだ二十二三であッたこと。第四、宮雄には些し虛飾の性質があッたこと。此四個が其緣談の承諾を碍げた岩であッたけれど。第二と第四とは直子の方

で容易に他人には言はなかッたことだから、先方へ返答した箇條は僅に第一と第三ばかりであッた。其處で先方では容易に承服せず、すこし談判に浪風が起ッて來たので、さァ直子の家では一同酷く心配をして來た。

日は夕紅に留守を爲せて西山の閨へ稍退き、そして魁の星の厚かましいのが先第一に一點二點あらはれた夕暮の事であッた、そよ〳〵と吹く風に傳はる花の香や、池水の面に輕く響を傳へる鐘の音も何やら優美に聞えるので、妾も不圖直子の事を思出し、今頃はどうしてお出でなさるか、尋ねて見やうと行ッて見ると、常は自然の景色をも樂しんだ人が矢張り最う心の愁に閉ぢられて一人で一間に茫然と籠もッて居たが妾を見るより出迎へて、

「おや阿園さん、よく入らッしやいました」。と一言をば言ッたものゝ、包むにあまる胸の思ひ流石に顏色に出て居た。

「貴娘あの事はどう爲りました、あの宮雄さんの一條ハ」。

「さァ其です。其事で色々に心配して居りますのさ。妾の心を御存じの貴娘もね、妾が那人を斷ッた子細をば貴娘も十分にハ御疑ひなさいますまいが…どうも世の中の事ハねェ」。

「えゝ何の妾が御疑ひ申しましやう。婚禮をするからには夫婦相助けて一生を樂しく終るのが誰でもの望でして、また其には壯健な、かしこい小供を持たうとは思はない物でもムいませんのに…身体の質が夫婦互に全じであれば假令心だけも合ふにもせよ…」

「左樣です、祿な小兒をも持てず、殊に宮雄さんハ…斯う言ふと變ですが…あの通りの宜い御器量ですから、迚も長く妾とハ、…ねゝゝ…睦ましく御暮しハ爲さいますまい。身体の質を考へず、只愛情にのみ眩んで夫婦になッた其曉、その相愛して居た夫婦が俄に他人と歹い事をして不德義な名を立てる例は昔から澤山あるのですものを。左樣言ふと宮雄さんは「何、私が其樣な事を爲るものか。私だとて何が德義だ位は知ッて居る」と一口に仰るのですよ。けれど、其が當にならないのですよ。理想の人すら知らんこと、この人間ハ動もすれば迷の霧に眩まされる、極てかない物ですワ。誰だとて最初から迷はうと思ッて迷ふ者はありません。皆迷ふまいと思ひながら其内に迷ッて行くものです。そればかりでも無くて御承知のとほり、ねェ、あの人は僅二十二三でしやう。そして妾は十九でしやう。言はゞ二人とも小兒です。何で世の經驗が有

りましやう。それは成程親たちに支配されてそして夫婦となッて居れば、なッて居られねてともありますまいけれど、たゞ夫丈では夫婦となッた甲斐は決してありますまい。僅ばかりの收入で辛く暮らして行くばかり、大概は親達に助けられて、而して親たちへは是ぞと言ッて仕出かして報酬を爲ることも出來ないのは大抵早婚の結果でしやう。殊に誰やら西洋の詩人が言ッたとほり、妾たちの年頃は丁度微風に連れる鳥の毛です。浮世の風の方向次第でまだ何う目的の變はるかも知れませんのに、それを、ねエ貴娘、些しものまはず、輕々しく言込む人ですわ」。

「本當に左樣ですね 。そして貴娘も常々仰るとほり、あの方の虚飾の癖、ねエ」。

「虚飾の癖から起る害は大した物でもありますまいが、人の侮を受ける事は中々阿諛に負けますまい。何故如彼男子の癖に……あれが第一可笑しいのですよ」。

「世には獨身の男女に限り其癖を持つて居て一旦配偶か出來た上は俄に其を止める人多くあるさうですが、それは重に身裝の上です。處が那方は身裝ばかりでは無くて、何だか入宗兼學の体で……」

流石に今迄は屹としく居た顏の上にも此一語で笑が出た。けれど直に無くなッた。

「牢固とはして居ない自身を土臺として他を評するのは得て間違易いものですけれど、唯今の處では妾も左樣思ふのです。が、其邊は此方から先方へ向ッて言へない處ですから、先方ではまた「百味をば味ひながら津唾の味を味へぬ舌」の格で其邊には氣が付かず、たゞ妾の方から答へる答にのみ就いて色々に論辯して、而して逐々實に困ッたことになッたのですよ」。

此儘で直子の樣子は如何にも、愁はしげになッて、常は人を蕩かした口態にも言ふに言はれぬ悲慘の色素が交ッた。はや夕紅も名殘なく地平線の下へ繰込んで、窓を侵す暮色の影が薄蒼く、火鉢の中の炭火のみは時を得て目に立ッて來る。下女は持ッて來る、まだ光の薄い洋燈を。其途端に話はしばらく途切れた、下女は起ッて行ッた、用も無くなッてから。其後でまた話ははじまッた。

序に一寸此處で申上げる事が厶います。ある淑女から美妙齋の「ふくさづゝみ」につき、下の御忠告が有りました。「ふくさづゝみ」の園子の口から全体の說話

はハじまッて居るのに、時にハ其口吻の中に擬人法が澤山あることも有る。是ハ事實上不都合でハ無いか」。

と　併し、それがために美妙齋ハ之を直接の語体で無く、いはゆる地の体で書いたのです、すなハち園子の言葉の美妙齋に入ッて美妙齋がそれを介錯して再度あらはしたのです。それならば擬人法が有ッても不都合な譯はありますまい。但し美妙齋ハ知らず〳〵之を多く用ゐるのが癖です。是にハなるたけ注意しましやう。

まアがれッと　第二回の下

其夜ハ談義もはてしかば次の日の朝未明に若君ハ少數ばかりの家隷を從へて身を凡人の姿にやつし、やゞて暇を母公に告ぐるも流石涙なる「思へば大事の使節なり。その使節一人にて國の運は定まるなり。或ハ途にて敵兵に見咎められなば今迄の辛苦ハ水の泡ならん。心せよやといましむる母の聲音も每にハ似ず悲ければろれを聞く身にも胸ぐるしさハ增すべかり。「くれ〴〵心し候はん。御身も心したまひて」と殘す一句の言葉にハ無量の思ヒコモリ口の果ハはるけき海と山、水際の鳥に驚かされ、梢の風に恐怖を懐きて人無き處を擇みつゝ進行く間に程も無く、音に聞えし土うべるの瀬戸の岸まで來りけり。船も名あるとなされども折あしかれば影も無く。世を忍ぶ身にはありながら今ハ詮術とても無しと從者の一人の某甲ハ岸の苫屋に立寄りて船を乞へども承引かずうにかく辭ふをやうやくに說勸めつゝ乘出すに此日ハ空よく晴亘り、風さへ靜なりけれど船ハ平地を行くが如く日頃の憂も忘るゝばかりいと快く進むになん若君はじめ皆々も物始よしと祝ぎつ、早事成りたる心にて打悅びて行く程に潮情や雲ハあらはれたり。「あれ恐ろしき風雲よ。こは便無し」と舟子たちも騷げば皆々打驚き、道こそも如何と見る間も無く雲はたちまち廣ごりて頭上におほひかゝるよと思ふ折から風さへも力を極めて吹來れば今まで砥とも見えたりし海の面も騷立ちて浪ハ思のまゝに暴れ、船を繰上げ繰下すその怖ろしさ却に口もて盡くすべうもあらず。「さて祉辟みたりしなれ、猶豫せば魚の口にぞ着かん。かくてハ迚も此儘に對向の國にハ着難かり。いざ〳〵歸らせ賜へかし」と櫓を立直さんとする程に、幼きながらも鶴の雛、若君つや〳〵聞入れず。

「腑甲斐なき白痴かな。ろも汝等ハ池の面を漕ぐばかりなる舟子なるや。涙に心を吞まれなば終には身をも吞まれんぞ。

風に魂奪はれなばやがては命も奪されん。恐るゝことかは。疾く行きね」。

「そは宜もすことながら……みろみせてこの波風を。奈落もくだくるばかりなり。人の腕には限あり。天の腕には限無し……」

「こざかしや。然ばかりのこと汝等に聞くまでにもあらず。骨折賃を高く拂ふもそなはち危難の保険にあらずや。見よや前途も快其處なり。引返も其間に進まば功を奏すべし」。

急立てられて辭むに由無く舟子も今更一生懸命、力のかぎり、命の限り、櫓を押すからに流出る汗もさながら粘土の崖より滴落つる泉の如く、漕ぐそのたびに高く呼ぶ聲も流石に四邊の音に交りて高くも傳はらず。「岸も咫尺の内となりぬ。少時ぞ、船子よ、力めよ」と狂ふが如く下知掛くる若き從者との諸聲も舟子の耳には初夜の鐘、たぼろにばかり聞ゆなり。

岸は間近くなるまゝに打返る浪いとあらく、勢沖にいやましたり。「切岸高かり。岩多かり。船碎かれな。現にも然よ」。傳ふ注意は晴夜の星。心づかひは眞砂の數。「いざ此浪ともろともに乗上げなん」と櫓を押すに、無殘や、途に逆潮あり、船は方向をば誤まりて、獸の如く峙ちし岩の腮に衝りつゝ……れ、其後をば言はずもがな。

原かね子の傳。

明治十三年七月月俸金四圓に増給す。仝年十一月函館師範學校建ち、かね子そなはちその裁縫教員となり、女子師範生徒裁縫科の教授を擔當せり。是よりさき、かね子は明治十年九月はじめて會所學校裁縫教員を拝命せしよりみづから其伎倆の足らざるを悟り、或は書籍につきてその順序方法を考へ、あるひは坊間の仕立屋につきて之を學び、專心之を究めしをもて其業大に進みしのみならず教授法に於ても亦大に發明する所ありしといふ。十四年十二月函館公立學校新築費の内に資金を義損し、褒狀を賜はる。十五年十月函館女學校建ち、かね子すなはち其教員を兼ぬ。十六年一月函館の學校裁縫教員取締を命せられ、毎月慰勞として七圓を給與せらる。四月函館縣高等師範科教授免許狀を受く。七月函館區内公私立小學校定期試驗係補助を命せらる。九月月俸八圓に増給す。十七年十二月職務勉勵の件をもて官より四圓をたまはる。十九年七月北海道廳師範學校、函館分校雇教員を命せらる。二十年四月北海道師範學校函館分校の廢止とゝもに職を罷む。此時にも官より慰勞として五圓をたまはる。是よりさき兼子病に臥

したるに、越て五ヶ月明治二十年九月に至りて遂に起たず、其四日あたかも眠るが如く黃泉の客となれり。時に年五十七歲。その一月まへ兼子はみづから病の篤きを知り、養子直次郎及二女まさ子、こう子をはじめ親戚を枕邊に招き、一々後事を遺言し、且其孫千之の學資をはじめ、其所有品を配分せられたること各差あり。

兼子婉雅の風に乏しといへども其身を持する端莊にして子女を敎ふること嚴し。不幸にして早く伉儷を失ひしば〱艱苦を嘗めたれども更に志を變せず貞操を守れり。晩年後進を敎導くにあたりては殊に女子の言語應對行儀作法に注意してよく之を矯正せり。常に人に語りて曰く「凡そ人怠れば意倦む。かゝる時に心を注めて敎師の言を用ゐるものなし」と また生徒に敎ふるに決して曖昧なる言語を用ゐず、多少增減を要する處といへども必確に其程を敎ふ。常に曰く「既に其正しき處を知らば其餘は皆臨機思の儘なるべし。もし一回敎師の言を疑はしめば終に進步の妨たらん」と 又初學生徒には懇に運針法を敎へて之に熟さしめ、既に之に熟すれば口授にて裁縫の法を敎へ、生徒をしてみづから裁縫せしめ、たやすく手を下して之を助けず。曰く「たとひ一二の過失を免れざるも生徒をして手みづから之を爲さしむるに非ざれば其智識を固むることあたはず」と 此三個はかね子が生徒を敎へし要領なり。今日函館に裁縫敎師たる者は多少かね子の敎授を受けざる者なきほどにて、その病に臥すに方りても日に〱其女生徒の訪來て病を尋ぬるもの引きも切らず九月六日神葬を以て送葬せしときにも會葬する者は官吏紳商をはじめとし各學校敎員殊に女子は殘らず、師範學校の女生徒まで總員二百名を超えたりとぞ。實にその苦節操行の絶倫なる、而も封建時代の女子に固有なる危激の行さへもなく、よく人の妻たる務を盡くし、よく人の、母たる務を盡くし、よく人の師たる務を盡くしたる功績の莫大なる、今記者があたらしく言ふまでにも非ず。此新年の硯を開くに際し、かゝるめでたき女丈夫の傳を幸ひに終るも流石に記者の老婆心、ひろく大方の淑女たちに其德を傳へて或は幾分の摸範たらしめんとするにあり。あなかしこ。

（をはり）

## 家政要錄

### 西洋婦人家內の實況

我國の婦人にして外國婦人に接せるの機會は唯訪問宴會の

時に限るが故に家内の實況ハ如何なるや詳にすると能ハざるべし、すべて目に見ざるとまで想像するハ甚六ヶ敷となり、西洋婦人の訪問宴會の時にハ美々敷着飾りたるを見又ハ夕方公園等に至れば往々婦人互に腕を約して散歩するを見て家事ハ一切僕婢に委ねたるものゝと思ひ盛裝して訪問宴會に日を消すを以て西洋婦人を學び得たりとなすハ畢竟我國婦人の西洋婦人か家事を經紀する有樣を知らさるより起る間違なり。此頃久しく英國に滯留せられたる某紳士に就きて彼國中等社會婦人の家事を整理する實況を聞き得たるか頗る目下我貴婦人達の參考となるべく思へバ其說話を次第して茲に揭べし。

紳士曰く「余ハ久しく英國に在りて始終某氏の家に客たりしが始めて其家を訪ひたるとき客間の裝飾の立派なると夫人の盛裝したるとに驚き如何にしてかく身分不相應の生活と奢み得るや不審ハいとゞ晴れざりけり、其後身ハ某氏の客となりて家事ハ何くれとなく手傳ひ居りしかバ夫人の家事を經紀する實況を知悉得たり、夫人ハ毎朝夙く起きて盥漱了れバ拜禮をなしそれより自ら牛乳を搾り家內の老少に飲ましめ自らも飲み朝飯を濟まし食品の買入にハ奴婢を使ふとあり、また自ら行く事あり、すべて庖廚に在る間ハ極めて麁服を着けて奴婢と共に立働く樣ハ迚も日本の中等以上婦人の眞似ると能ハざる處なり、食品の用意整ひて後ハ衣服を更え部屋に入りて讀書或ハ仕事をなし午後に至りて訪問の客に接し、或ハ人を訪ふ、此時ハ盛裝して庖廚に在りたるときと殆別人なるが如し、訪問接待も濟みての後ハ食事の用意をなし食事濟みて後ハ家內一室に團欒し子女ハ膝下を圍繞て夫人の小說を讀むを聽き或ハ夫人の談話を諦聽するを常とす、日々順序整然として紊るゝ事なし、永き月日の間家庭靜肅にして未だ嘗て怒罵の聲をきかず、子女ハ衣服淸潔にして皆活潑爽快に生長ちたり、余一時靴足袋のいたく汚れたれハ之を芥捨場に捨てんとせしを夫人に見付られたり其時夫人のいへる樣靴足袋とて汚れたるものハ洗へハ淸くなるべし破れたるものハ綴るべし巳に用ゐるに足らさるに至りて復燈心となすべしと誡められたるを聽き其用心の密なる其儉約なるに感し是でこそ身分不相應の裝飾をなし盛裝をなし得るなれと曩日の疑も釋然と霽きて唯感嘆の外なかりき」と物語られたり。

由是觀之西洋夫人の讃嘆すへきも盛裝して訪問接待するの時よりハ寧麁服して家事を經紀するの時にあるべし、其家事を大切にするの美風ハ取て以て法となすべし、我國にてハ

古來の習慣去りがたく中等以上の婦人にハ兎角家事を屑とせざるもの多し、家事を勤むるハ婦人の本分なり、故に西洋にてハ中等已上の婦人皆かくのごとし、記者ハ茲に理窟を述ぶるをなさず唯我貴婦人に勸告したきハ西洋風を學ぶハ唯其外面のみならず其眞面目なる家內の實況を見て之に倣ハれんことを希望して止まざるなり。

## 小兒の育て方

產兒の取扱ハむつかしき者にて取扱のよからざるより後來小供の發育を障げ病身者となすことなどある故子の生るゝときハ產婆ある地にてハ必ず產婆を招くべし、なき地にてハ子供を澤山育てたる經驗ある婦人の取扱を賴むべし。產婆或ハ經驗ある婦人を賴むときハ產室の事いはずもがなと思へどもさて心得ぬことはとかく不自由なれバ茲に簡單に產婦未だ產室を離れざる時の心得產兒乳を哺む中の扱方を述ぶることとせり。

子の生れ落ちたるとき產湯とて母の胎內より附纏ひ來る汚を洗ひとるハ誰も知ることなるが口中の汚を洗ふことを知らさる人なり。不潔物はたゞ皮膚のみに附けるにあらずして產兒の口中にも含みをるなり。故に產湯の節柔なる絹を指に卷て兒の口中に含める汚を拭ひとるべし。又世間には往々小兒の內病の徵候も見へぬに妄りに胎毒下しなど云ふ藥を用うる者あれどそれが爲めかへりて病を引き出すことある故滅多に用ゐざるこそよけれ。若し用ゐんとならば確なる醫者に尋ねて許可を得るか或はその方劑を請ふべし。臍の緖を斷つにハ先つ切らんとする處よりすこし根元に近き處を苧にて緊く括りて後すこしも銹なき刄物にて切斷ことこそ肝腎なれ。產兒ハ皮膚薄くして風ひき易き故產湯の節は四方を立て切りて風の通はぬ樣になしおくべし。

マクリは無効の者なる故用ゐぬこそよけれなど云へる醫者あれども抑も初め出づる產婦の乳ハ通常の乳と異なりて一種の下劑なるに我國にては荒乳と唱へ捨つる故產兒は不幸にしてこの天授の下劑を服すること能はさる故その目的主として通をつくるにあるマクリを用うべし。乳づけるときハ母の乳をよく〳〵もみ和げ最初は月立ちたる小兒に吸出さしめて後に用うべし。痛しとてもみ方足らされば乳出あしきのみならず乳房の腫れることあるものなり。乳の飮ませ方に付きて一言注意し置きたきことあり、乳房を哺ませて小兒を眠りに就せるハよ

けれども此時は特に注意すべし然らされば母も其儘眠りにつきて乳房をもて小兒の鼻と口を壓へて呼吸の根をとめ取かへしのあらぬためし多し恐るべきとなり。又小兒既に眠りたるときは速に乳房を離し柔なる絹切をもて口中を拭ひ去るべし然らされば口中に殘りたる乳汁口熱の爲に腐り寢返りの時咽喉に入るときは大なる害となればなり。かやうなるとは乳母など心得居らぬ事なれば雇ひたるときくれぐれも言聞かせおくべし。

小兒のとき乳少なければ虛弱ものとなり生涯壯健なる人とはならぬ故母の乳少き時は乳母を付くるか牛乳或は凝乳(コンデンスミルク)を用ゐるべし。されども人の子を養ふには人の乳、牛の子を養ふには牛の乳が最もよきことは誰も信じ如何なる學理にても許す所なり。故に色々の事情ありて人の乳にて養ふと能はさるときは出來るたけ人の乳に類似せるものを用うるがよかるべきは勿論なり。さてなにが人の乳に最も類似せるかと云へは驢馬の乳なれども是は供給少き故一般の人に用ゐ給へと云ふは出來なれ相談なり。また此外に獨逸にて工夫したる人造の乳あれども直段高くして西洋にても餘り用ゐられさるほどなり。そこで醫者や衛生家は已むを得ず牛乳を用ゐるよ凝乳(コンデンスミルク)を用ゐよと云ふなり。されども牛乳も凝乳も其儘用ゐよとは申さぬなり。牛乳は人乳に比ぶれば糖分少なく、脂肪極めて多し凝乳(コンデンスミルク)は糖分非常に多く脂肪も多き故人乳に類似せしめんため牛乳には砂糖と水をわりて糖分の少きを補ひ脂肪の多きを薄め凝乳には四倍より六倍迄の微溫湯をわりて糖分を薄め小兒の飲用に適する樣になして用ゐよと申なり現に用ゐる砂糖は乳糖と申して動物の乳より製せし砂糖を用うべし何れの藥舗にてもあるなり。然らされば子供に必ず害あるなり。かく云はゞ牛乳は天然に牛より出づるものなれば仕方もなけれども凝乳(コンデンスミルク)は人工にて牛乳よりつくるもの故糖分を減し得べしと疑ふ人もあるべけれどもこれは無理なる次第にてあれほどの砂糖を入れざれば直に腐敗する故已むを得ず防腐劑として用うるなり。畢竟するに乳の出方少き婦人方或は他の事情ありて我が乳を飲ましむるとの出來ざる婦人方は乳母を雇ふが最もよし。之とも不都合なれば牛乳か凝乳を用うべし但牛乳には水と砂糖を入れ溫めて呑ましめ凝乳にも水又は湯をわりて用うべし總て生牛乳を用ゐる節は前以て一度ヅヽ〳〵煮て用ゐる方良し左すれば牛より牛の病を人にうつる事なし

肺勞ハ子供に遺傳し特に傳染するものあれバこの病にかゝれる婦人の乳にて育つれバ傳染してかやうある小兒ハ通例二十歳前後にて肺勞の爲に死そる故肺勞の婦人分娩せバ直に牛乳を與ふるか健康なる乳母に與へ母の乳を與ふるあかれ。また肺勞を患へざるも産ミたる子供二人も三人も育たさる婦人は必ず何か育たざる源因ある故、わが乳を呑ませざるべし。乳母を撰むとは緊要よして先づ遺傳病（肺病梅毒の類）なく無病よして心は惇朴なる、やかましくなき者を置くべし。無病の者にあらざれは、其病毒子供よ傳染そる者故、よくよく注意そへし。ライヒ氏の試驗よよれば、肺勞を患ふる産婆ありて十人の子供を扱かひしに其十人肺勞を傳染したりと云へり。こは少しく極端論なれども、ともかく産婆そら傳染の恐あり、況して毎日傍を離れずして乳を哺ませる乳母の害は知るべきなり。乳母の性質如何は小兒の性質よ關係を及ぼし、その性質よ似るもの故、心惇朴よして、やかましくなき者を撰むべし。

清潔法は小供の發育よ極めて必要よして皮膚は勿論衣、食、住とも總て清潔よそべし。清潔ならされは、とても壯健よして活潑なるものよは成人そまじ。且つ子供の病氣の源因は主よ不潔、風邪、悪乳より起るものと知るべし。清潔法よつきては別項よ説くべければ、就て見るへし。風邪は百病の源となる故、風ひかさぬやう充分注意そへし。さりとてあまり暖かよなし衣類など澤山きせてはよろしからず、かへりて病をひきおこそ種となるへし。小兒の肌着よ木綿衣を用ゐるハまだしも、絹衣を用ゐるハ却てあしゝ、肌着はフラチルよ若くものなし小兒ハ特更此物よ限るべし。

## 清潔法

いらつめ第五號よ學藝記者は皮膚の事を說き人体の垢よ付き隨分むさくるしきお話をいたせしが早年も明けて萬事新なる年の初あれハ茲よ清潔法を述べて年と共よ身体をも新よ清らかよしで永く健康の幸福を享けむと企つるは新年の初刷よハ適當の題目と考ふるなり。さて人間ばかりであくあらゆる動物ハ皆清潔法を心得て居ります讀者の愛猫が隣家の狆狗よ噛まれたと御覽じろ猫の社會よハ醫者も藥もあけれどもまがあすきがあ疵口を舐めて居りますと日あらずして全快いたします。また猫か産をいたしましたとき別よ産湯の用意もありませんが親猫は稚兒の全身を舐めて其不潔を去ります此舐り

て不潔を去るとは餘程の効驗あるものと見え狗猫の傷き或は病のあるとき患部が舌の届く處なれは早速に平癒すれとも舌の達かぬ處になれは容易には癒えぬなり。人間の清潔法も其初は自然の必要より起りたるものなり、身体衣服日を經るに隨ひ垢染みて次第に不愉快を感じ遂には熱病抔を起すよりして身体を洗ひ衣服を濯ふに心もいと清々しく覺えて病も頓に癒えたれは始めて入浴洗濯の必要を感ずるに至りたるなり、併し唯これ丈では清潔法の點では狗猫と異つた處はない然るに幸いなるかな近年衞生の大切なることを知り學理を研究するものから身体衣服の清潔にせねばならぬ道理を知るに至りたり道理を知らず唯自然の必要より來たるものは間違つた事をしながら自ら知らざること時々あるなり。

病氣を已に發したるに治するものは醫術なり病氣を未だ發せざるに防ぐものは衞生なり近年衞生の領分次第に擴まりて醫術の領分は日々に縮まる有樣にて人生の幸福は之に越したるとはない、して衞生の主眼は清潔法にあり。

世間では住居の清潔不潔或は子女の衣類の垢付かず小奇麗なると垢染みたるとを見て其家の主婦の心掛如何を評するは間違なき判斷といふべし故に清潔法の行はるゝと行はれざるとは婦人の心得如何に在るなり。

清潔法といへば衣服住居すべて身体を圍繞するものに關したることなれども何よりも最も切實なるは身体其物の清潔法なり依て身体の清潔法より始め漸次説き入るべし。

學藝記者が已にいひし如く「垢は自然に剝け去るものにあらず又自ら拭ひ去るものにもあらざれは洗ひ落すより外に方法は更になし」とは間違のなき話にて申す迄もなく湯か水を用ゐる事なるが已に垢を拭ひ去れは三百万の氣孔は豁然と開き汗腺よりは盛に体内の汚物（炭酸瓦斯及び他の腐敗物）を排出し得るなり老廢物は皆血液中に雜り居るもの故其排出盛になればなる程血液も清淨となる血液は身体を榮養保存する根本なれば血液清淨となれは身体益壯健となる腫物などのふきでるは血液中に多く老廢物を混ずるが故なり。

さて身体の清潔法には二法あり即温浴と冷浴となり我國にては仕合にも燃料の廉直なるより都會にても一錢五厘にて温浴の愉快を買ふことを得べく上流の方々は多くの費をかけずして内風呂の愉快を占め得給ふの故入浴も至極簡便なる筈なるに兎角婦人方は身始末に手間の入る故か毎日の入湯を厭ふ風なれば茲に一層便利にして最効驗多き清潔法を傳授すべし。

それ外にもあらず冷浴の法ありこれをなすにハ次の用意を要す。

一疊若くハ半疊倍の開き戸付浴室（浴室を設けがたき場合にも適宜なる隅を見立て引幕にて立切るべし）

洗水盥壹個

織目疎き手巾二筋　こすりたる跡にて身体に赤く痕を留むる程疎きものあるべし二筋の中一筋は乾きたるものあるべし。

道具は是丈にて澤山あり、毎朝蓐を離るゝと直に浴室にゆき水にて總身を拭ひて後乾きたる手巾にて赤くなるまで擦り直に衣物を着るべし、初め衣を脱ぎてより再び着るまで手早く五分間になすべし決して五分を踰ゆべからず、緩々と構へるときハ必らず寒戰を發えて皮膚の赤くなることなし、身体虚弱なる人又ハ幼稚にハ少しく湯と和すべし、子供ハ生來水遊を喜ぶもの故毎朝の冷浴にむつかることなかるべし、若し泣出すことあれバ必ず湯の熱過ぎるか又ハ扱方の手間取りて身体冷却し寒さを感ずるからの事なるべし、浴室の用意なき場合には寝衣の上に衣類を引掛け袒ぎて上部丈擦り上部丈了れば直に肩を入れ随て下部に及ぼすべしかくすれバ寒戰することなし。

かく毎朝冷浴を怠らざれハ氣孔として常に開かしめ皮膚を清潔にし又之を強壯にし以て氣候の變化に感ぜざるに至る随て感冒咳嗽の患なし。冷浴は男女に通じ行ひてよろし我國の如きハ前に述べたる如く温浴の便もあれハ毎朝必冷浴し時々温浴すれハ最よろし。

身体の清潔法ハ唯皮膚のみに限らず何れの部分をも清潔にせざるべからず歯は朝夕必ず楊枝にて磨き食後就蓐前には必嗽くべし、爪は常に短く圓く切るべし髪ハ常に乱れざるやうにそべし奇麗に梳き上げたる髪ハ此上なき頭飾なるぞかし少くも毎週一度髪を洗ひ毎日一度ハ全体梳るべし。

## 保健食料

今度神田和泉町の東京衛生試驗所に於て新に衛生參考品を陳列せられたるが其中重なるは飲食物の成分標本にして之を十種に類別し一々其種類に付き滋養分の多少を比較し又學問上に於て日本人に適する食料即保健食料は二十四時間に

| | |
|---|---|
| 蛋白質 | 二十五匁五分六厘 |
| 脂肪 | 五匁三分二厘 |

含水炭素　百十九匁七分九厘
を人体榮養に必要なりと定め之によりて目論見たる六種の献立等なりいらつめ第六號家政要録大西氏寄書の中食物の献立を作るには飲食物成分表の必要なるを說かれ精密の表を選られ今回別刷にすべき樣記載せしが今度衛生試驗所に陳列せられたる成分表を參考して完全のものとして印刷する積なれば茲には前に述べし六種の献立を揭ぐべし。

第一例　鷄卵二個　味噌五匁　小松菜二十匁　胡蘿蔔十匁
　百合二十匁　鯛三十匁　竹麥魚三十五匁　白米四合

以上の食物中左の主成分を含有す

蛋白質一〇一、〇瓦　脂肪一九、二瓦　含水炭素四四六、六瓦

第二例　牛乳一合　味噌五匁　葱二十匁　馬鈴薯二十匁
　萊菔拾五匁　牛肉六十匁　白米四合

蛋白質九五、七瓦　脂肪二八、〇瓦　含水炭素四五四、三瓦

第三例　豆腐二十五匁　豌豆拾五匁　豆腐皮三匁　比目魚二十五匁　胡麻油一匁　雞肉三十匁　味噌十匁　白米四合

蛋白質一〇一、五瓦　脂肪一九、四瓦　含水炭素四三四、七瓦

第四例　味噌十匁　裙帶菜一匁　菜豆拾五匁　鯵二十五匁　昆布七匁　油揚十匁　牛肉三十匁　バタ八匁　馬鈴薯三十匁　白米三合五勺

蛋白質九五、八二瓦　脂肪四六、〇六瓦　含水炭素四〇四、五二瓦

第五例　味噌五匁　豆腐十匁　雞卵三個　比目魚四十匁　菠薐草二十一匁　豚肉拾八匁　馬鈴薯三十匁　白米三合七勺

蛋白質九五、六四瓦　脂肪四八、四七瓦　含水炭素四〇一、一五瓦

第六例　牛肉六十匁　バタ七匁　雞卵二個　馬鈴薯五十匁
　麵包一斤半

蛋白質九五、三五瓦　脂肪四七、三三瓦　含水炭素四〇九、〇瓦

## 講義

### 美術の話

美術の効用は極めて大なるものにて人の耳目を樂ましめ心の幽鬱を晴らすは言ふ迄も無く亦能く其趣を玩味すれば人の心も何となく高尚となり優美の性質自から生じ來たりて感情

の自然と氣高くなるは誠に美術の徳と云ふ可きなり。左れど美術とて強ちに繪畫、詩歌、音樂の類に限りたる譯にも非ず。總じて美術には自から定まりたる規則ありて若し其規則に從ひて言葉を用うれば談話も一種の美術となり身体の運動も亦一種の美術となる演説舞踏の如き是なり。又平生の談話にても美術の規則に協ひたるものは其人の人品を高くし聞くものをして不知不識快樂を感ぜしめ毎日の坐起進退にても美術の法則に從ふものは自から優美にして人をして思はず幸福を覺へしむるものなり。左れば假りにも美術の規則を知るものは啻に繪畫、管絃等藝術の上のみならず他人と交際するに付ても一家内の幸福を保つに付ても其益する所少なからず。聰知る可きものは美術の規則なり、務めて從ふ可きものは美術の規則なり。

美術とは純粹快樂を以て直接の目的とし、其快樂は一人若しくは數人に限りて享くるを得るものにあらざるものを云ふ。口に美食を味ふは如何にも快樂なるには相異なしと雖とも一人之を味へば他人は皆其快樂を共にするを得ず。觀感より起る快樂は其範圍稍廣けれども香の散するは到底物質の夫丈減譯なきば是迚も亦た多少專占の性質を免れず唯目に見る所耳に聞く所、繪畫、音樂の類は幾千人にても其快樂を共にし少しも相爭はずして無上の幸福を感ずるを得是即ち美術の美術たる所なり。尤も細かに論じ詰めば區別の立ち難き所無きに非ずと雖ども先づ大体此區別にて充分なるべし。又美術の目的は間接には人の感情を敎育し品格を高尚ならしむる等に在れども先づ其直接の目的の快樂に在るを以て其他の所謂有用なる技術と區別せることを得べし。

美術とは廣く之を論ずれば美と云ふ感覺を生ずるものなれども其美と云ふ感覺も細かく之を區別すれば美麗、雄壯、諧謔の三つとなるなり。然らば美なる感覺は如何なる原因に由て生ずるや。請ふ左に一々之を列擧せん。

第一。單純なる耳目の感覺。
第二。五感の想像。
第三。各種の感動。
第四。方法と目的の釣合。
第五。異中の同。
第六。見る者聞くものに想像の余地を存ずると
第七。齊調。
第八。雄壯の感覺。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第一　耳目の感覺。視覺聽覺の快樂を生ずるものは直に美術と云ふを得るや否やは一の疑問なれども兎に角穩かなる音響、光、色、澤、等の自然に人の耳目を樂ましむるは平生人々の經驗する所なり。

第二　五感の想像。美食を味ひ、良香を嗅ぐより生ずる愉快は其性質一人若しくは數人の占有に皈し美術の本性に反すれども之を畫に寫し之を語に措くときは一種の美術となるものなり。例へば暑中自身の清冷の空氣に觸れ爽涼を感ずるは固より美術上の快樂に非されども墨陀の堤上に納涼するの樣を畫けば見るものをして皆美術上の愉快を感ぜしたるが如き是なり。

第三　各種の感動。新奇を喜ぶの感動は凡て美術の之に投せんとを欲するものにして事柄は左程にも無きとにても新奇なる間は却て大に人の耳目を樂ましむるものなり。喜悅愛憐等の情は一人若しくは數人に限りたる快樂なれども是等の感情を起す可き物を描けば美術の一材料なり。例へば小兒を乳育する圖の如き是なり。自負、憤怒等の情は美術に寫す可きものならねども是等の感情を起す可き相當の原因あるときは亦た之を寫して美術上の快樂を起す可きものなり。其他似寄の例は少なからされども煩はしければ之を略す。

第四　方法と目的との釣合　事物の能く其目的を達し得可き有樣を見れば自から愉快を覺ゆるものなり。例へば大なる建物を見るも其土臺固く柱も太くして高屋を支ふるに足るときは大に愉快を感し之に反して其基固からず建物の永く保存せんと如何にも難き樣に見ゆれば大に之を危むの念を生し美術上の快樂を覺ゆるとなし。衣服の稱廣きの立派に見ゆるは一は此原因に由てなり。機械を見るも其物を造り出すに如何にも容易く見ゆるときは亦た同一の感覺を起すものなり。又同しく其目的を達し乍らも非常の力を用ゐす何の苦も無く之を爲し遂げ可きを想像すれば其愉快の感覺一層大なり。人の擧動の角立たざるを見て快樂を感ずるは主として之が爲なるべし。軟風の舟を送るを見て思はず之れに見取るゝも亦同道理なり。能く順序立ちたる物の美麗なるは一は目的と方法の釣合に由るものにして室內若しくは店先の美麗なるは何物も能く順序を得て步行を妨ぐ可きもの無く何事を爲すにも容易して困難なきを想像せしむるものなり。

第五　異中の同。種々樣々の細き事に心を勞らすに當りて忽ち異なる間にも同しき所あるを發見せば心恰も重荷を卸した

る如く極めて愉快を感ずるものにして如何なる名詩如何なる名畫と雖ども其一部々々を結合す可き一の目的なきときは決して之を美術の法則に合ひたるものと云ふ可からず。

第六　想像の余地。凡て美術は其寫す可き事物の全体を現はに說き盡すときは興味の薄きものにして必ず幾分か見る者聞く者をして想像を以て足らざる所を補はしむるの余地を存せざる可からず。山水を畫くには水流の百折して遂に其跡を失ひ遠山の霞に鎖されて僅かに角頭を露はすの景を寫すが如きは主として之が爲なり。第七第八は最も重要なるものなれバ次號に於て之を詳說す可し。

## 文藝、美術

### 和文を學ぶ捷徑。

既に立派な學校で和文を修めて御出でなさる方には此說もあまり必用ではありませんが、それでも幾分か御參考にもなりましやうと存じて此處で披露いたします。御存じの通り、和文と一口に言ひましても、大古の和文や中古の和文など、色々な區別も立ちまして決して其を無茶苦茶に見る事は出來ませんが、今日世の人が重に用ゐる体はまづ中古の体裁です。

それは何故かと言ふと大古に傾いた文を用ゐるのは些高慢めいた處もあり、または思想の進化に制せられて自然後世めいた物を作るからの事で、今日の和歌に是ぞと言ッて目新しいのが多くありませんのは是にも本づいて居ることです。其處で今日和文を敎へる人は大概まづ最初に竹取物語か伊勢物語か、又は些し進んで土佐日記、徒然艸或は枕の艸紙の類を弟子に讀ませて語法や文法を敎へ、その傍に文を書かせます。が、是がすこし六づかしいのです。なるほど竹取にもせよ、伊勢にもせよ、俗語で說いて俗語で敎へ而して俗語で會得するのですから其意味を悟るだけは十分でありましやう。然し其から直其儘筆を立て丶文章を流暢に書くことが出來ましやうか。否さ、たとひ美くはなくとも、間違無いなめらかな文章が出來ましやうか。經驗のある人には分解りますが、此法で行ッた日には勝手に自由な文章を書くのは容易なことではありません。二月や三月の仕事ではありません。

それはまた何故です。混入ッた事に及びますのは御退屈の種ゆゑ、荒畧を申しましやうが其手本とすべき文の意味を悉とく覺えることが困難であるのが一の原因です。此原因が和文を修める途にある妨得の岩石です。現に、御覽なさい、竹取

にも伊勢にも又ハ土佐日記にも學者が腦髓を絞ッても猶まだ定まらぬ不審の文が有るでしやう。たゞそれだけあら宜うムれますが、其上にまた其文を書れた時代の考ハ今日の考と幾分か違ッて居ます。すなハち疎く比へて見れバ親類似（ファミリー、ライクチス）の有る外國文です。したがッて其意味ハ悟得るにもせよ、其上の一種微妙の「考」に染まりますのは中々難い處の物です。

是等の不便を救ふにハ、他でもありません、後世の小說の中で文の一番好いものを擇んで讀むのに限ります。後世の小說といへば西鶴以來の著述です。けれど八文字屋物でむしろ下卑た事を以て主眼とするやうな傾も全く無くもありませんで殊に俗語を土臺とした物から和文を學ためにハ爲りません。降ッて三馬や一九の文、なるほど美くは出來て居ます。しかし作者が和學に通じて居ませんから無論學には足りません。たゞ學んで好いものは馬琴か京傳か乃至種彥の文のみです。和學に通じた深さに於ては馬琴とて左程ではありません。が、例の健腕で其處を巧に應用しました。雅俗を折衷した鹽梅が非常に美事に出來て居ます（一二の杜撰ハあるにもせよ）。之に次ぐのは京傳と種彥です。が、京傳の著述の中でまづ摸範とあるべき物は稻妻表紙に止まッて、種彥の作の中では昔人偶に限ります。雅文の性質を帶びた文に於ては此二人とも似て居ます。けれど活動の有樣が馬琴ほどでもありません。其處で馬琴の文の中で孰が一番良いのと言へば、其外にもありますが、先八犬傳の第十一回から第三十回までの處です。

御承知のとほり馬琴の文は盛衰記、平家物語及び太平記などの物から全体の骨組を拔き、之に源氏や枕の双紙の肉を加へたものでして中には隨分疎末な處も少からず有りますが、しかし此文を多く讀んで而して其筆法を覺へた上ハ之に似た体裁の文章を書くことも自由です。其處で此文のみを學んだ日には猶何處が杜撰やら、何處が惡い處やら、その鑑識が有りません。それをバ傍古文を讀ませて自然に救ッて行くのです。斯のとほりで進んで行きますならば天晴めでたい和文をバ終に書くことが出來ます、而も容易に、流暢に。竟畢馬琴の文章ハ古文の土臺に後世の思想を加へたものですから、曉るにも譯ハ無く、學ぶにも骨の折れませんことハ直に古文と組擊して目を眩ますのと仝日に論じられる物でハありません。

或ひハ斯う言ふ人もありませう、「その方便は中々佳いが、矢張り古文を讀習ハせて杜撰な處を救ッて行くでハ無いか。そ

れでは直に古文に入るより困難が有るだらう。成功の年月も容易なことではあるまい」。と　然かし實際は左樣でありません。直に古文を學んでも普通の言葉を覺えるのは尤も勞を要します。殊に直と和文を學べバ、まづ其意味を探るのに可なり骨が折れましやう、全く初心の人たちにハ。既に馬琴文の髓を得て而して古文を讀む日には一二の言葉ころ注解に依賴して其義をも探りますが、文全体の意味を取るに於てハ餘程容易なことになります。却ッて直に古文に向ふのより遙に骨も折れません。よし骨が折れたにもせよ、猶運筆が自由になるといふ利益は、實に流暢につゞれるといふ利益は斷じて多く馬琴文を學んだ處から起ります。直に古文に向ッた人の文章が最も美事になるまでの年月も、之を實驗すれバ分解りますが、近体文を學んだ人の文章が美事になるまでの年月より長いには違ありません、たとひ道理から推して見ても。現に記者が知ッて居ます二三の人も此法で瞬く間に可なりな文を書くやうになりました。

以上は簡略を尊んで証據や例をも十分に與へず、そして走筆ゆゑ精密な論法にはなッて居ませんが、大抵の意味は看客に於ても御分解になッたろうと存じます。前に述べました處を猶包括ッて申しますれバ。

「近代の文の好いのを主として學び、傍古文に目を注ぎ段々に古文に移行け。

更に之を圖であらはしますれバ、

近……近古……近古……古

## 新形の花かんざし

花かんざしといふ物、むかしは實物の花を直ろのまゝ頭に簪した習慣もあッたさうですが、後の世になりましてハ人造の細工で天然の花に似せて簪を作ることがはじまりましたので自然少女たちも作花のみをかざすことに爲りました。然るに近頃ではまた、是はすでに世のいらつめの方の中には御存じの方もありましやうが、實物の花を簪すことが流行しはじめまして時々此市中にも此新形を用ゐて居る人が見えるやうでそから、やがての内には廣く行はれるかも知れません。ろれなら此處でそのために一寸畧評を下しましても強ち無駄ではありませまい。

作花の簪が人に用ゐられる其主の原因は何でしやう。つまり實物の花の乏しい時や、實物の花に美しいのが無い時や、又

はある一の花を他の花より猶好む時などに其欠點を補ふために之を用ゐるのが其原因でありましやう。勿論作花は天然の花と違ッて幾度も簪すことが出來ますれも其原因の一では有りましやうが、しかし是れみで作花が少女たちに用ゐられるといふ理窟は無い譯です。或は作花は天然の花よりは美しいためばかりで斯う人に用ゐられるのですか。否、天然の花よりは美しくはありません。天然の花には活々とした處が有ります。天然の花には言ふに言はれぬ氣韻が有ります。作花にはそれが有りません。作花にはそれが有りません。

實に作花と天然の花とを比べますれば優劣もすぐに知れます。如何にも造花の雛菊は奇麗でしやう。しかし、それでも天然の蒲公英には一歩を讓らなくてはなりますまい。如何にも造花の薔薇は美事でしやう。しかし、それでも天然の枇杷の花の右へは決して出られますまい。前の者は死物です。後の物は活物です。活物と死物…はて無論活きて居る鯡鯉は鯛の干物より高價です、見た處の点に於ては。

それだのにまた殊更に死物を擇んで頭にいたゞき、ろしく化粧と爲す審美學者が此世には何故ありませうか。よほど可笑しいことですねェ。造花の色が如何ほど美しいにもせよ、眞白な、天然の花ほどにゆかしくは見えません。否、ゆかしく見える譯はありません、幾度も言ふやうですが。造花が人に用ゐられるのは全く寳物の花の不足を補ふためと幾度も用ゐられるためとの二点から起ッたことに違ひなければ自然用ゐて宜い造花はどうしても此國に無い花などの形を作ッたもののみです。其他の花などに於ては故意々々死物に就くるなどの不都合を行ふにも及びません。そして天然の物を用ゐるに就ては時には花が無いこともありましやう。其時などには仕方がありません、造花を用ゐてもようございましやう。其外は一切寳物の花とした方が却つて優美な處が有ります。勿論寳物の花は長く用ゐられませんが、一日毎に變へたとて費用が嵩む譯でも無く、また色々に變へる方が却ッて變化が有ッて物珍らしく思はれましやう。

---

### 新形の封袋

此頃新形の封袋がすこし現れました。次號までには詳に探ッて十分に御報道いたしましやう。

---

### 婦人の手紙認め樣。

大抵談話應對振によりて人の器量ハ推測し得るものなるが手紙もまた同じことにて本人の器量相應より過分に立派にも書けぬものなり、併しながら兩人の對話は口より出でゝ耳に入るのみにて其場限りに消失るものなるが手紙といふも筆話に過ぎざれども一旦書きたる文字ハ中々消えぬものにて何時にても取出してくらぶることも出來又衆人の目にもとまるものなれハ談話應對よりハ一層注意を要するなり。

手紙は要事を先方に傳ふるもの故用事を傳ふるに事欠かねバその餘の事ハどうでもといふ人あれどさすれは談話とても用事をたすが目的ゆゑ禮義などは不用なりといふべきに左ハいはざるよりして考ふれは手紙にも一定の体式の必要なることを知るべし。此体式に付てハ世間に兎角の議論もあることなれば記者の意見ハ折を待ちて陳述すべし今此處にハ在來の手紙に必要にして又改良して後も必要ならんと考ふる二三の注意を述ぶべし。

多く讀み多く作るは文章を稽古する秘訣なり、手紙もまた文章の一なれハ學ばずして善くしがたし、十分筆の立つまで稽古せざれは意中を書取ること六ヶ敷かるべし、畢竟手紙の上乘といふは思ふことを十分に書取り先方をして當方の意を會得せしむるに在り、故に第一務むべきは手紙を達者に書くことなり、達者に書かんと欲せは趣向を考へ成る丈文例を澤山讀み又自ら澤山に作るに在り。

次に文体を失はざること肝要なり、文章は如何に巧に出來たればとて文体を失ひたる手紙ハ見るに足らず、吊ひ悔の文と面白く可笑しく書き、又歡びの文に悲しき事とも加ふるが如き皆体を失ひたるものなり、吊悔の文ハ本先方の愁傷を慰め又同感を表する爲なれバ他の吉事を書加ふるハ殊に忌むべきことなり又「めでたくかしく」をもて文を結ぶとよろしからず、吊悔の外餘事ハ述ぶべからず用事あらバ別に申送るべし尙々書ハ殊に愼むべきなり。目上の人にも敬ひたる目下の人にハ鄭重親切にして侮らざるやう認むるハ文体の得たるものなり。すべて文体ハ無禮なるべからず無禮なれバ人の恨を招くものなり、さりとて恭敬の過ぎたるは諂諛に陷りて甚見苦しきものなれは驕らす諂ハず中道を得ることは筆者の方寸に在り。

文中に諧謔洒落は あまり用ゐざる方よろしかるべし、さもなきとより先方に立腹させることあるものなり、又六ヶ敷故事を多く引用し又は多くの漢語を挿むが如きも學問を衒ふ様に見へて却て己の温和を傷け人にさげしまるゝものなり。

是よりは手紙の様式に付きて一言すべし状紙は成る丈清に白きものを用ゐるべし汚れ或は皺あるものは無禮なり。書出三寸程は白紙をあまし置くべし。墨は濃に過ぎ又淡に過ぎざるを肝要とす尤歡ひの文は墨くろ〴〵と認むべし。なだらかによどみなく書くはよけれどもむしりがきして讀みがたき様にありては用を辨せざることあり、間違を生ずることあり、殊にかゝる手紙の認振より平素の行放縦なるをも卜知すべきものなれば最愼むべきことなり殊に目上の方へ贈る手紙と別きて約に認むべきなり。

手紙を書放しにするときは儘前後撞着等の生ずるものなれば妙齢の淑女方は一應草稿を起し給ふこと然るべし、認め了りたる後は如何程心急きの時にても一度は必ず讀み返し給ふべし。

## 初春の湖（言文一致体 くもの譜）

美妙齋

こほりのねじろは
いまだわかず、
むかばとはるとは
なほもとりこ。

わかばのそよぎは
するのきしべで
かぜになげき
なかまのことりは

月ぎもまでゝゐて
いつくるはるかと
こがれあぐむ。
のぞみとあさひは
するのみかは。
かすみがのずゑに
まくをすれば、
あさひはそのさず
こほりをせめさて
せめて、せめて、
つひにはひとくち
とかしてやぶると
あとをばみづとり
はよぎまもる。
くるすにこもつて
こひやふなは
われてのやぶれに

きもをつぶし、
つくづくさぐると、
ゐるのはつばさを
もつさいきだ。
「さア、これ、さゝへん。
それすぐにげろよ。
にげぬとのまれる。
にげろ、にげろ」。
「にげてもむだゞぞ、
こひやふなや、
するどいひげをば
すなにすやし、
よろひと身につけ、
金鱗をどしの
てつのかぶと
かぶつてゐながら
にげるはよわむし、
これこひ、これふな

うべせ、うべせ」。
「われわれ鵜どのが
たふてくるよ。
あぶないもやもや、
よげてコイよ」。
「わのれはあうあの
もしこくおげるぞ。
こがねいろの
このくちばし見て
わの、さよげるのあ。
さてさてひたようあ
うとだうとだ」。
ひさしくわふたが
うとれよげた。
鵜れいまさらよも
はらがたちて、
ひとりでつぶやき、

もときたみちへと
いってみたが
でぐちわどこだか
さッぱりわからぬ、
そこしもまからぬ、
まらよしれぬ。
「こゝらがたぶんわ
でぐちだらう。
わやおやこゝよも
はて、まこゝも
こやりのてんじやう。
こまッさどうしやう、……
いきがつまる……
でぐちやでぐちや
でぐちわどこだよ。
くるしい、さいへん、
あゝら、いきが……」

## はるのあけぼの（言文一致体）

美妙齋

一

つゆまぬれてうらぐひその
こゑもひとあはれ、そぞめの
むかしもまいろみノブずり
そのみちのくぬれもかげよ
ふるかあず、ゑのはおふじき。
そのの月ながらかよひくる
まがッさでとのひとふじは
あさげコまちのゆめのあと。

二

そよふくかぜもまださむい。
つゝみてあめるあさぎりよ
もじはりまどはきえまよふ。
いまやゝめぐむたけのあの
はそいてさきであたゝめて
あのひねよふく笙さへも
かそむかきねのちおざくら
はろめくかげのあいらしさ。

三

やまさくらとのあけぼのも
ゆつよりはるがうつくしい。
もあのかげよいゆめでゝ、ち、
めめでゝおにもはなのかげ。
みねでのぞめばそこまゝわ
こゝろよかゝるあとはかり
こゝのたにまもそのきしも
ひどりのすみかべにのゆき。

四

ねむげよみわるかいだうの
はゝよよそまるつゆのたま。
ひとよれをかぬくれあゐの
えよしのいとか、ゑたひもか、
むそびみだしたしどけあさ。
れぼろながらのかつらそに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

わかれたのちはまはおしの
ゆめをちぎるの、ねたましい。

五

いけのの、ゞ、こよみかぜのくし、
とかくそやなぎのあきかみよ
うざそれつゆのタテでむて。

アケルまもなくしらみゆく
ねやのすきまもつれないよ

よくいつむめのはそひかほ、
えだをかすめてとびくるふ
はれとむかりがみゝにつく。

明治二十一年の新年よ又俗語体で

「こよみもあらでアラタマの
としをばひとつうさねても、」
「うさねがひないい身のたろう」
「れもふたあとはやき大刀の
トグすべとてもツキのくも。」

「つひよはくもをふきはらふ、
うれしいときもあるだろう。」
「つとめるなら」となぐさめる
「ひとのことばをきけばまた
さてあよとなくありがたい。」

## 學藝

### 食塩の効用。

多青園主人 述

或人大久保彦左に問て曰く世の中に何物か最も旨きやと彦左答て曰く塩に越したるものはなしと。彦左の奇言は理窟らしくて理窟に合ぬとか能わりませぬ、此塩のお話も矢張其流で何も塩か旨きものでも何でもなければ塩かなければ如何ある山海の珍味とても人の口には旨からず、即ち塩なければ世の中の旨きものなし依て塩は世の中の旨きもの、第一なりといふなり、されども其実塩ばかり旨からぬ又塩なき山海の珍味も旨からぬ、山海の珍味に塩を和して始めて舌鼓を打ち頤を落す程の美味を得るなり。彦左の理窟か間違よしても兎に角人間か此鹹いものを用ゐなければ何物も旨いと思はないといふ天性を持てゐるは何でも人間と生れたからは塩は食はなければならぬ訳があるとでせう、世間の人は塩を用ゐるは塩かなければ何物も旨くないからだとのみ心得てゐるでせうがそれは腹か減るから飯を給るのだといふと同じ考で浅見と申してよろしい。そこで主人は何故塩か人間に必要だといふ真成の理窟を述べませう。

人間の骨は生れ落ちたるときは軟かにして譬へは生木のしなやかなるが如く次第に年を重ぬるに随ひ漸く硬くなり老年に至りては遂に脆くなりて枯木の如く挫け易くなるなり、支那の婦人の足の小さきは骨の軟かなる幼稚の頃より布をもて足を緊り紮るか為なり、又緊く帯を締める習慣を受けたる児童の胸膈の縮まるか如き、又母や乳母の小児を寝かせやうの不

注意より頭容の不恰好となるが如きは皆幼稚の時骨の軟なるが爲なり、故に小兒の美醜の幾分は母や乳母の注意不注意にありと知るべし、さてかく軟かなる骨が年を重ぬるにしたがひ硬くなるは何故なりやと尋ぬるに全く骨の組織の中に漸々鹽分の加はるが爲なり、即壯年の頃に至りて始めて骨の組織完成すといふべし、さてかく肝要なる鹽分は如何にてし體內に入り來るやといふに食物と共に口より入る外に道はありません、もし幼稚の時より一切鹽を斷ちますれば三十四十に生長ても骨は軟かにして足腰も立たず全然蛭子尊同樣になりませう、これが人間の鹽なくて叶はぬ一の理窟であります。けれどもこればかりではないまだまだ肝要な道理があります。

食物を消化す機關は口と胃腸でありますが口中にては齒が食物を踈化する間に唾液が出でゝ其力によりて澱粉質のもの即米麥豆の類を消化しますそれより胃腑に入りまするど胃腑の內面よりは胃液を出して大に消化をいたします故に唾液胃液は消化機中の大役を勤むるものでありますが此兩液共其成分の大部分は鹽素であります、それだからもし鹽氣斷ちといふしますれば口より唾液出ず胃より胃液出でずして食物は消化せず遂に病氣となります、これが鹽のなくてかなはぬ譯でありまして毎日適量の鹽を要します、海邊に住ふ漁師などは日々海風に吹かれ其幾分が皮膚より鹽分を吸收しますから口より取る鹽の分量が減しますがそれに反し山里に住ふ人は鹹き澤庵漬を嗜みすべて鹹き料理を好むも自然の加減で有ます。

以上は人間の生存上鹽の効用でありますが食物の保存者として鹽の効用は夥しきもので北海の魚肉腐敗せずして東京人の庖厨に供そるも鹽の功あり西京の松蕈東京人の食膳に上るも鹽の功あり其他澤庵漬といひ茶漬といひ醃漬によりて食物の腐敗を防ぐ事中々數へ盡すとが出來ない又其外工業上の効用に至りては格別肝要なるものなれども淑女方には直接の利益も少ければこれはおはなしいたしません、兎も角も効用のかくまで大切なるとを知らば廉なればとて麤末にしてはなりません。但し下等の鹽は食用によろしからず其中にはにがりを含むが故なり併し下等の鹽より上等の鹽を得るの方法はいらかめ第三號學藝の部に鹽水を以て鹽を洗ふと題して述べ置きたれば參考せらるべし。

又之を藥用しても効能がありまず寒胃などより咽喉の焮衝を起したるとき水に溶して含嗽すれば焮衝を去るの効は鹽酸加里に劣るとなし又呼吸器病の初期の中に醫者の用ゐる吸入

劑ハ鹽と重炭酸曹達を水に溶したるものなり。不意に口より血出で止まらざるときは鹽を一匁か二匁を呑込めハ直に止まるべし。又便秘のとき極めて空腹になしれき鹽一茶匙を水に溶して頓服するときハ後腹の痛むとなく通利あるべし。

### 最も湯の出易き急須。

急須にて湯を注ぎますときにまだ嘴より湯の出ぬ前に溢れ出ることが折々あります、それハ茶滓が出口を遮ぎるからだとのみ思はれますが急須の製方によりては茶滓がなくとも溢れ出ることがあります、かやうな不都合なる急須ハ全く把手と嘴の付方のあしきによるものであります、大抵數寄者の用ゐる急須は必ず把手と嘴との間が甚だ狹く出來て居ります、かやうな品を雅致があるとかいつて賞翫いたしますから番茶を煎る急須まで其眞似をして居ります、これが湯の快く出ない理由でムります、それでハどういふ恰好のものがよろしきやといふに把手と嘴とが曲尺の兩脚の如くあまりハ十カオもせずまた脚を擴めず把手か北を指せバ嘴が正東を向くやうにして出來てゐるものが最も湯の出易き急須ですから急須をお求めなさるときハ所謂雅致よりは實用が肝腎であります、さてかういつればかりでハ學藝記者が態々擔ぎ出した甲斐がない、これも矢張學理の應用だから其理窟ハ隨分面白い、今糸巻を角取りに拇指と食指の尖との間に挾みて廻轉ときハ指に挾まれ居らぬ角尖が最も大きな圓形を空に畫きませう、此大きな圓形の線に當るところが最も遠く糸巻の中心を離れた場所であります、尖角が下を向いた場合には糸巻の中で最も低き場所となります、急須にて湯を注ぐときは全く糸巻を廻轉のと全じ譯合で把手は指間に挾まれた角に當り把手と丁字形に付きたる嘴は廻轉する角に當ります、そこで水にハ最も低きに就く性質を具ふるが故に少し急須を傾くると嘴の處ハ急須の中最も低き場處となるゆゑ水は忽ち其に集り來りて嘴より出去るなり、然るに水の好んで聚る處は塞ぎとめて方角違に嘴を付くるときハ水ハ致方なく戸惑をして飛んでもない處から溢れ出るなり。

### 樹木を見て地質を識るべし。

同じ市中にて或る部分には一種の樹木繁茂し其隣地には他の種類の樹木生長し他の部分には此等の種類の樹木を一向に見受ぬものあるハ人々の知る處なり。或ハ繁茂せる樹木によ

りて其地の土性を識るの法を發見したり。松柏檜杉或ハ欅の繁茂せる地ハ乾きたる磽确地或ハ砂礫の地盤なるべく山毛欅ハ乾きたる白堊質或ハ礫まじりの地よ發生すべく楡の類ハ豐腴て稍濕氣ある地よ適し檞秦皮ハ粘土よ生し白楊柳の生長する處ハ卑き濕氣多き土地なりと知るべし。然るよ是等の樹木ハ大抵雜生するものなり唯一際目立ちて或る種類の樹木他の種類よりも數多く且盛よ繁茂する場合よ此鑒定法を應用すべし（サイアンチフヒツクアメリカン）。

## 叢話

### 仇を恩。

九歲十歲ばかりの女の子が眼よ涕を溜めながら一人の老女よ向ひ

「叔母さんよゥ、叔母さんよゥ、かへして御呉れよ、妾の雛兒をさア。さア活かして返して御呉れよゥ」。

「うるさいな、雛兒ハもう死んで居るヨ」。

「さア何故左樣死なせたのだよ。よゥ叔母さん。渠ハ妾が小使錢の殘餘を溜めて買ッたのだからさア」。

「仕方が無いヨ。惡いから殺されたのだ。垣根の下から潜ッてハ家の畠へ來て人參をあらすから殺されたのだ。自業自得だ。樣ア見ろ。太ぶとい阿魔め」。

言捨てゝ老女ハ我家へ這入ッて仕舞ッたので女の子も仕方無く泣々家へ歸ッて來て姉の顏を見るより力限の聲をあげて泣出した。

「あら、花坊ハどう爲たの。また横町の峯ちやんよいぢめられたのかえ」。

「うゝン、峯ちやんでハ無アい」

「そんなら留吉さんとこの犬にまた追駈られたのだらう。あに、左樣でも無いと……好いよ、まア涙を拭いて御話しよ、靜に。あの、ね、矢鱈に涙を流そものハ宜い御新造とハなれないとさ」。

「本當かへ。あら笑ッて居るくら……う……う……嘘だア」。

「嘘でハないよ、本當だよ。そして誰にどう爲れたの」。

「あの……あの……御隣の叔母さんが……雛兒を……てら、姉さん……叔母さんが」。

「おやゝまア可哀相に……あんまりな」。

「ねエ、姉さん、可哀相に……あんまりな」。

「はゝゝへ、御前もそうしな子だよ、よく他の口眞似をして。

だが、御聞きよ、あの叔母さんは本當は悪るい人では無いのだよ。御前の鳥が悪かッたから殺されたのさ、叔母さんだとて腹も立つだらう、畠をあらされては。花坊の姉様面を猫が掻回はしたら花坊はどう御爲だ」。

「妾は猫を抱いて外へ連れて行くわ」。

姉の眼には情の露が一滴。

「あゝ花坊、それでこそ好い花坊だ。だから雛兒をころした叔母さんをも猫のやうに赦ェ」。

「抱くのかえ」。

「否さ、やさしく御爲といふことさ」。

一二ヶ月の後、老女は人参を抜いて洗ッて居ると此の罪の無い女の子は莞爾として其處へ來た。

「叔母さん、手傳ッて上げましやうねェ。妾は姉さんに吩附けられたのでは無いよ、え、叔母さん、誰にも吩附けられたのではないの」。

あどけなさ、あゝ姉の教育のほども思遣られて愛らしかッた。其日は年の終で、翌る日は新年であッた。朝起きて門口を開けて見ると美しい籠の中に奇麗な雛兒が入れて、其處にあッたので…吃驚した。

「姉さん御覽よ、この雛兒を」や[illegible]。姉は來て見て[illegible]落した、情の水を。「あゝ叔母さんが呉れたのかね」。

---

裏店の女房。

ある裏店の亭主ー「おい阿金、手前のやうな[illegible]婦人は無いぜ。朝は一体御天道様と一途に起きるのが人間の道だと言ふのにお晝頃まで寢て居て….」。

女房はぬからぬ顔でー「それは其筈さ」。

亭主ー「何で其筈だ」。

女房ー「己は毎晩、夜蕎麥を食ひに十時頃まで起きて歩行いて居るは。御天道さまは六時かぎりで引込んで仕舞ふでは無いか」。

## 批評

詩人の春。大和田建樹氏選、文盛堂出版。印刷といひ、製本といひ、ほとんど申分なく出來て居ます。中の唱歌は和田垣文學士、國府寺文學士、谷村吉男、橘花守、妹尾求、鷲山穀櫻、及選者などの人々の作で隨分めづらしい者もありますが、まづそれを一言で評せば選者の外には調も趣向も備はッた作はありません。因て此處では選者の作と選者が添刪したもの

とをのみ許して其外は省きます。

其前に一寸序について一言申さねばなりません。和田垣文學士の序は氣取ってありますが下手でも、文學士の筆とは見えません。國府寺文學士のも同樣ですが、否味でないだけが長處でしやう。選者の序は簡畧でよく事實を盡くして居る有益な文です。

さて「水」といふ選者建樹大人の作は近頃出色の傑作です。四首の中で春のと冬のとが猶すぐれて居ます。けれど春の方の第二句に「夢さめて」とある、この句が力弱う厶います。意味はつまり「融ける」といふことを婉曲に言做したに違有りませんが、今ひときざみの御鍛練がわらば金剛石も啻に指環の中に入って居ません、屹度冠に上ります。第五句の「愛して」は何故に「めでゝ」と御用ゐなさらなかったのでせう。第六と第七句とは新らしい趣向ですが去ろし、前との續方があまり好くはありません。夏の方の第六句「すゞしき風もさそひきぬ」は「すゞしき風も生れ出ぬ」などの如く水を主として現した方が宜う厶いましやう。第七句「よどらぬ月もやどしきぬ」は今様に「やどりきぬ」と何故爲さらなかったのです。殊に「よどらぬ」が此處では活きて居ますまい。「よどる」か「よどらぬ」かはまだ此儘ではわかって居ません。秋の方は疵を持たぬだけで決して旨くはありません。冬の方は上出來でそ。次に「螢」の歌はおどけなさが見えて居ただけです。次に「雪」の歌、疵はありますが趣向は尋常の物でありません。斯らいふ詩をこのくらゐに譯してこそ始めて……

扨其次は壓卷とも言ふべき「春の月」です。如何にもうるはしい御趣向、敬服の外はありません。李賀の作ではありませんが、錦の嚢に入れたう厶います。たゞし、強ひて言へば第四句「銀金の衣の袖より」はほとんど鶏の肋です。第八句「うたふらん」は奇を求めて奇に陷いったことで些耳に障ります。全体形容といふ者は幾分の似寄のある物を取って比較することで似寄の無い物の比較は比較ではありません、形容ではありません。この歌の「うたふ」は果たして月に縁が有ますか。左樣、縁はありますまい。鳥の、虫の、風か、水か、すべて聲を出すものについては「うたふ」といふ形容をも用ゐられましやう。聲も無く、音も無い月に向って聲の縁語は無用でしやう。此場合は「一聲ハ月がないたか郭公」の句と違ひます。

次に「夕暮」の歌は通例の物よりは宜う厶いますが、去かし傑作とは言へますまい。

次に「農夫」の歌は第六首より可なりな出來です。

次に「妹の影」の歌あか〱哀が深う厶います。生きて居るものと見せて置いてそれとなく死んだことを匂はした處は中々輕う厶います。たゞ惜しいことには情がまだ濃といふ方では無いのと「玉章」といふ語をばひたすら「手紙」に擬做した處です。

次に「小說の君」も最初の三四首よりは後の方が好くなって居ます。

實にこの批評の欄内も狹いことゆゑ十分に評することが出來ませんのは太甚遺憾のことですが兎にも角にも大和田氏の御作は近頃にない絶品です。是から唱歌の改良もいよ〱必用になる折から、折角此後も此道のために御盡力を願ひます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

肺病養生法。醫學士竹中成憲氏著、今日新聞社賣捌。此書にある大概の事柄ははじめ今日新聞に出て居ましたところが望手の多いため、其時の新聞紙は賣切れてしまひましたので更に增補して便利のため一冊の書籍として相で、なる程有益な物です。醫者の中には肺病（純粹の）でも無いものを肺病と言立て、それを癒して腕前を見せる類がありますけれど藥や何かで直るのは純粹の肺病ではムいません。純粹の肺病は全く不治の症ですから何でも其を受けぬやうに用心するに越したことはありません。それには實に此書などは至極適當の物です。中の分類は衣服、呼吸器、入湯、飲物、食物、烟草、運動、寢床、談話、勉强、職業、藥、温泉の十三門に分かッてあッて一々親切に、簡明に說いてあるのは誰にも分解易いのを主とした工夫がみられて居ます。價は僅少ですが、利益は澤山です。

西洋女大學。片岡信子譯、英國ラどくりふ夫人原著、丸善、叢書閣發兌。先編纂の体裁から評しましやうなら、此書も例の題辭序文病に取付かれて居ます。去りし、末松謙澄氏の序はあれだ結構です。是でこそ序の役目をば十分に盡くして居ます。次に稱すべきは此書が女流の筆に成ッた趣をあからさまに書顯して只それがために買手を招くやうな不見識な事を爲なさッたとで、其譯者が貴女であることはやうやく凡例に「妾」とあるのを見て始めて分解るやうなのは評者も心から敬服いたします。そしてまた凡例に於てはきはめて謙遜なる語氣で然も已むを得ざるやうに言はきましたのは如何にも本文の戒を違ッて居ませんで、誠に是ひとつ讀んだばかりでも「温和」といふ思想が何となく評者の心中にも浮びました。殊に扨本文は無論完璧と申すより外に言葉はムいません。是ぞといふ粧飾は有りませんが、それで平易な、おだやかな、うるはしい、正しい文が流暢に、よどみなく進んで居ますところでも譯者が文藻の心掛に深いのが十分に知れます。そして又一々の戒は如何にも間然する處はありませんで、實に末松氏が言はれましたとほり、婦人ばかりか男子の爲にも、保証します、益になります。兎にも角にも近頃めづらしい書物です。如何なる職業の人でも、如何なる種類の人でも之を熟讀して常に其身に行ふて居ますなら必後世に芳名を殘すやうな人になるに極ッて居ます。

戰場之花。前田香緣、喜多川麻溪二氏共譯。英國惹、む、す、具、ら、ん、と原著。春陽堂出版。是もまた題字黨の一人です。題字病の患者です。繪は石版で可なり。製本も美事ですが、それと平均を取るためか紙質が些と……小說としては詰らぬものでも。苦、ら、い、み、あ戰爭の逸話とすれば先面白うムいます。元來具、ら、ん、との小說は玉屋が見てしまッた濱の眞砂で、數こそは澤山ありますが、金剛石は有りません。それを殊更に拾上げられた御大量には敬服いたします。誰やらは死馬の骨を買ッて……左樣です、此小說も原文よりはるかに面白うムいます。近頃めづらしうムいます。文にも疎漏な處や杜撰な處も可なり無くはありませんが、去か

し此頃矢鱈に出る踈瑪瑙の段ではありません。

## 月報

○大日本婦人教育會　教育に熱心鋭意なる府下有志婦人諸氏が發起して組織せる仝會は本月二十一日其第一回を開かるゝ由にて會員を四種に區別し第一推戴員には皇族の御息所を戴き第二名譽會員には本會に利益ある貴婦人の入會を請ひ第三特別會員は女教員諸官立女學校の卒業生及び此れと同等の才識ある婦人中より選擧し第四通常會員は廣く有志の婦人を以て之れを充たし毎月一回講談會を開き講談者は特別會員を以てし尙客員として廣く內外の碩學大家專門學者を招聘して諸般の學藝を丁寧反復に講談し會員をして此れを傍聽せしめ其筆記を輯錄して雜誌と爲し洽く會員に頒布するの計畫なりとぞ。

○日本音樂會　去月九日例の如く上野の華族會館に於て催せる仝會ハ來會せし者實に夥だしく今回ハ種々の歐洲の樂曲に加ふるに日本の箏、三絃、胡弓、尺八等の合奏もありて梅櫻孰れ優り劣りハあらぬ中にもチーチエ夫人の最高音部の獨唱歌同じくチーチエ氏の最低音部の獨唱歌は一段聽者の耳底を洗へり其他音樂學校教師シー、ソポレツト氏と幸田延子とのピアノの運奏抔頗る滿場の喝采を得たり諸般の音樂全く終りて散會せしハ午後十一時過ぐる頃なりき。

○東京婦人交際會　仝第二回ハ去月二十四日前回の如く富士見町富士見軒にて開き會員諸氏の會食談話等ありたり。

○育女會　婦人の爲に教育の普及を謀り必要の學理を講し眞性の女德を修め風俗の流弊を矯め婦人の地位を高尙ならしむるを以て目的とする仝會は其發會を來る廿八日京橋新肴町の開化亭に於て催し學藝の講談等もあると云ふ。

○華族女學校　仝校にては本年より乘馬の科をも加へらるゝ由終日机にのみ凭りて優柔に流れ易げなる生徒の運動を助け精神を活潑になさしむるには此上なき事にぞありける。

○東京師範學校女子部　同部にてハ前號のクリスマスデーに御雇女教師スツレート氏の催しにて生徒打寄り福引を行ひいと面白き事なりしとぞ。

○婦人唱歌會　音樂學校研究生木村作子等諸子の發起に係る仝會は世に完全の婦人唱歌會なきを歎き一週三次唱歌會を開き當分九段坂下の公園內統計學校を以て會場に充て廣く音樂に篤志なる婦人を募集せらるゝと云ふ。

○淑女以文會　去る七日午後二時より猿樂町尙案學校に於て催せる仝會ハ來會せし淑女百名に及び杉浦重剛辰巳小次郎諸氏の席上演說、會員諸子の君が代、英國々歌等の唱歌、歐洲管絃樂。箏、三絃、尺八の日本音樂の合奏、談話遊戲等ありたり就中理學士玉名程三氏の尺八にハ手並の程感に入りたり身は學士にありて此嗜好あるはいと床しくぞ覺へける仝會は旣に其一學期を經過し本年の二學期よりハ玉名氏の十九世紀大發明記事、鳥居狀氏の和文、武田英一氏の經濟學等の講談ある由にて益淑女を涵育養成せらるゝとの事なり。

○日本美術協會　元龍池會は今度日本美術協會と改稱し上野公園內櫻ケ岡に美術館を建築せらるゝ由なり同會の役員は左の如く撰定せられたり

第一部(繪畫付書)委員長下條正雄、副長前田健次郎○第二部(建築園治)委員長山高信離、副長木定○第三部(彫刻)委員長今村長賀副長岸光景○第四部(陶磁、七寶、玻璃、金屬器)委員長坂田春雄、副長松尾儀助○第五部(漆器蒔繪、織識其他美術工藝品)委員長山本五郞、副長鹽田眞。

○京都通信　京都婦人慈善會　去月三日俱樂部に於て慈善會を開きたり當日は高等女學校教師英國人エステール夫人の日本語にて家庭教育の話あり其他演說唱歌等ありて中々の盛會なりしと　グリーン夫人の歸國　グリーン氏夫婦は明治二年より我國に在留したれば能く日本語にも通し我國の情態をも普く諳せる人なるが夫人は音樂の名人にて殊に慈愛深き性質なれは京都に於ても其恩惠を受けし人許多あり夫婦の中に八人の兒を設けたるが其教育の眞きとハ人々感賞せさるものなし其一例を擧くれば小兒の疾病に惱みしを見聞せしものなく親子兄弟姉妹の間に怒を發せしとなきのみならずいまだ他人に對して不快の念を懷かしめしとなかりしといふ然るに去月二十六日歸國の途に就き歸路亞歐諸國を漫遊し八月頃米國に歸着をべき豫定なりといふ。

○女學校私設の計畫　豆州三島の花島某は女子教育の甚不完全なるとを常に憂ひ本年の春頃より女學校設立の事に盡力されしが今度いよ〳〵校舍をしつらひ外國教師をも聘して高等普通教育を授くる事に取極められしといふ。

○靜岡女學校　昨年靜岡西草深町に新設せし靜岡女學校ハ入學生徒殊に多く旣に教場の手狹を感ずるに至りしに新に教室を增築し多少校則をも改良し益其目的を達する計畫なるよし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# いらつめ目次 自第壹號至第六號

| | 號數 |
|---|---|
| **社說** | |
| いらつめ發行の趣旨 | 一、 |
| 女子の地位を進むるに付ての注意 | 二、三、 |
| 女子の德育 | 四、 |
| 日本婚姻法に付ての所感 | 五、 |
| 女子ハ男子よりも貞節ならざるべからず | 六、 |
| **姫かゞみ** | |
| 風琴調一節(小說) | 一、二、三、 |
| ふくさづゝみ(小說) | 四、五、六、 |
| まあがれつと | 四、五、六、 |
| 原かれ子傳 | 五、六、 |
| **家政要錄** | |
| 家政のこと、食物を料理する理 | 一、 |
| 金銀の性質、雞卵料理法、 | 二、 |
| 家內貯金の用意、家の間取のこと | 三、 |
| 如何にして食物を購はんか | 三、 |
| 下女下男雇入期限 | 四、 |
| 肉類煮燒の事幷炙燒の事 | 五、 |
| 家政を整ふるには熟練を要す、食物の獻立 | 六、 |
| **講義** | |
| 經濟學通俗講義(天野爲之氏) | 四、五、六、 |
| **雜錄** | |
| 和歌稽古の仕方 | 一、 |
| 迷の淵(新体詩) | 一、二、 |
| とよあんだあく傳(新体詩) | 三、四、五、六、 |
| 色紙短冊書方の事 | 三、 |
| 白粉に付きて | 四、五、 |
| 人を訪ふの心得 | 四、 |
| 音樂を學ぶに付ての注意 | 四、五、 |
| 博雅の三位、眼鏡の事 | 六、 |
| **學藝** | |
| 飯釜の蓋、搗水を以て鹽を洗ふ | 三、 |
| 日月地の大さと距離の話(鮫島晋氏) | 四、 |
| 肺病の話付新工夫呼吸器(竹中成憲氏) | 四、 |
| 皮膚の話 | 五、 |
| 人間腹中の蟲(竹中成憲氏) | 六、 |
| **叢話** | |
| 孝兒奇譚 | 五、 |
| パルチー孃の譚、あどけなき少女 | 六、 |
| **論說** | |
| いらつめに望む(杉浦重剛氏) | 一、 |
| 如何にして女子の地位を高むべきや(井上十吉氏) | 一、二、 |
| 女子諸君に望む(上野さん子) | 二、三、 |
| 禮をば忘るべからず(佐方まづ子) | 五、 |
| **批評** | |
| 小說草葉の露、家庭教育、 | 三、 |
| 新氏女德新說、英和尺牘書法、 | 四、 |
| 女權沿革史 | 五、 |
| 善惡之岐、雅語綴字例 | 六、 |
| **寄書** | |
| いらつめ記者御許へ | 五、 |
| 女學雜志第八十四號を讀て感を述ぶ | 六、 |

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

山崎忠興譯

## 貴女紳士 交際の栞 一名西洋遊戯の鑑 全一册

今や洋風の交際日を追ふて盛に行はれ身中人以上に在るの士君子ハ往々夜會舞踏の筵に臨まざるを得ざるの場合少からず然るに此交際の法ハ未だ本邦に新なるを以て時好を追ふの士君子ハ勿論舊套を守るの人と雖も之を知ざれバ大に恥を取ること勘しとせず本書は男女公會に於て坐作進退の注意より紳士貴女互に相對するの心得等に至り又舞踏の種類方法數種を擧げ丁寧詳細に書き述べたるものにして加ふるに傍訓をも附したれバ婦女子と雖も一讀忽ち交際の新法に通じ舞踏の諸法を諳するを得實に當世必讀と謂ふべし請ふ江湖の紳士貴女諸君續々愛購を賜はんことを

新保磐次 著

## 金港堂叢書 日本普通文如何 一册 定價金二十錢 郵税金六錢

世ニ本邦普通ノ文字ヲ改ムルノ説多シ、又普通文章ヲ論ズル者ナキニ非ズ、然レドモ文字ヲ改ムルハ一朝一夕ノ業ニ非ズ、文章ヲ論ズル者未ダ則ルベキ説ヲ立テズ此書本邦普通文ヲ論ズル精細ニシテ確實ナリ因テ以テ普通文ヲ改良スルノ指針トナスヘシ蓋シ此書一度出デテ本邦普通文ノ運命長久ナリト云フベシ江湖ノ君子一讀シテ其實ヲ知リ賜ヘ

池小民次 著

## ○家庭教育 全一册 定價金四十錢 郵税金拾二錢

此書は當時の教育に基きて作りたる家庭教訓なれバ人の父母たるものは常に能く是を讀み置きて其の子供を教へ導くべし然るときは其の子家に居ては父母の教を守り小學校に入りては其の學科を受くることと器を造て物を入るゝが如くいと易かるへし然のみならず成人の後賢き人となるも愚かなる人となるも其本ハ家庭教訓の善し悪しに由るものなれハ子供持ちたらん人々は皆一本を備へ置きたきことにこそ

中川元 譯述

## 文華の燈 教育美談 一卷○定價四十錢 ○郵税金十二錢

本書ハ兒女教育の要綱を原著者エルチスト、レグーウベー氏が自ら愛兒を育成したる實跡に擬して叮嚀懇切に說き示し恰も彼の有名なるルーソー氏のエミールに稍や類したるものなるを中川君博雅の筆を以て極めて平易に飜譯せられ加ふるに傍訓を附したれは童蒙婦女子と雖も一讀忽ち其意を解し深く興味に入るの間自ら教育の要旨に通するの趣ありて苟も小學の教育に從事する諸彥は勿論世の慈父たり慈母たらん者坐右必す一本を欠く可からすと云ふ

**金港堂 原亮三郎本店** 東京本町三丁目

**金港堂 原亮三郎支店** 大坂北久寳寺町

## 知識之戰場

毎月一回 定價十錢 郵税參錢 郵券代用一割増 割引一切不仕候 郵券二錢にて見本發送仕候 縱七寸半 横五寸 紙數百二十頁餘

●●●●●●

初冊目錄 **緒言** 知識之戰場緒言 **論說** 漢學不可廢論、中村正直●質疑、西村茂樹●孔學總論、谷本富●基督教の要領、伊勢時雄●青年輩脳髓中の忘念、中江篤介●男尊女卑の是非得失、加藤弘之●性質變換論、嘉納治五郎●僞老成家、尾崎行雄●適中倫理說、中島力造●我が日本帝國の將來を前知する說と方法、杉亨二●佛教興廢論、辰巳小二郎●美情の說、井上圓了●景色畫の區別、宮島鎗八●論理學の必用を論ず、菅了法●日本に第二の日本語を作るべし、肥塚龍●自由貿易の眞理ハ人間萬事に應用すべし、德富猪一郎●古代文學論、小中村清矩●社會思想の變遷、原坦山●小說の自叙躰記述躰、森田思軒●禮儀、マクレー●將來之日本、貫宇迂史●習慣養成論、ラデストック等●**批評** 鐵世界、大江逸●南總里見八犬傳、依田學海●**史傳** ソクラチイース傳、和田垣謙三●**文藝** 詩、歌、和漢文、俳句、時曲、小說、ハカバツク回航談、諸件●**纂記** 學藝上の實驗、發明、改良等に係る新奇有益の事項數件

—○— 知識之戰場 學藝之世界

發行所 東京北豐島郡金杉村二百六十三番地 **賛育社**

▲注意▼知識之戰場を賣捌所等にて御求めの向ハ定價の外に相當の手數料を御拂ひ下さるべし▲心用▼

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●繪入 **頓智協會雜誌** 一册金十錢郵稅一錢 十册前金壹圓也

右ハ臨機應變隨時制宜ノ頓智ヲ發育養成スルノ主意ナル本會ノ雜誌ニシテ頓智ニ關スル論說材料問答評論續話古今利用頓智談頓智家傳記會員姓名寫眞祝詞賛成文評判記雜報廣告等ヲ掲載ス○十二月ヨリ每月二回發行○本誌ハ第三號ヨリ漸次改良セシガ十月發行ノ第六號ニハ例ノ記事ノ外ニ頓智博覽會ト貸座敷頓智樓及ビ會主宮武外骨之妻頓智孃洋服束髮頗ル別嬪ノ寫眞附錄アリ又十一月發行ノ第七號ヨリハ洒落之門主人春の舍おぼろ二文學士ノ賛助ヲ得頓智ニ關スル論說及ビ小說ヲ掲載セリ尙七號ニハ東京團子坂淺井梅次郞氏ノ造菊人形日吉丸ガ小六ノ刀ヲ奪フ圖ヲ摸寫セシ錦繪附錄アリ○本會ヲ滑稽傳習所ラシク見做スノ人アル由甚ダ迷惑ナリ

發行所 東京府神田區駿河臺北甲賀町三番地 **頓智協會**

醫學士竹中成憲著 改訂增補 **肺病養生法** 定價金四錢郵稅共金六錢一錢切手代用不苦施本等ノ爲十册以上御購求ナレハ特別ノ御相談可申府下ハ各雜誌屋繪草紙屋ニ就テ御購求被下度シ

此書は恐るへき肺病を未然に防くとを親切に說きたるものにて之を衣服、呼吸器、入湯、飲物、食物、煙草、運動、寢床、談話、勉強、職業、藥、温泉の十三門に分ち極めて平易に極めて親切に說きたれは一本を携へなは益すると尠からざるべし殊に廉價なれは慈善家にも施本として頒つに最も便なり

取次所 本鄕湯島天神町一丁目五十九番地 **成美社**

## 社告

○いらつめ代價 一册金八錢 六册(半年分)金四十五錢 十二册(壹ヶ年分)金八十錢 府外每號郵稅一錢宛申受○每月第二土曜日發兌

雜誌代ハ前金ニ付御注文ヲ受クルモ金子到着セサレハ配達セズ金子盡クレハ配達ヲ止ム依テ金子ノ切レサル樣前以テ御差出ヲ乞フ金子御差送ノ手續ハ郵便小爲替ナラハ拂渡郵便局ト本鄕郵便局ト御記入ノ事幷ニ受取人氏名トアル所ニ本鄕湯島天神町壹丁目五十九番地成美社ト御記入ノ事○郵便切手ニテ御差送リナラハ一錢切手一割增ニテ御差送リノ事二錢以上ノ切手ハ御斷

○廣告料一行(五號文字二十七字詰)金五錢○十一行以上金四錢五厘○二十一行以上金四錢

但前金ニアラサレハ載セズ

いらつめ賣捌所

| | |
|---|---|
| 東京神田區佐柄木町 | 東海堂 |
| 同 同 雉子町 | 團々社支店 |
| 同 同 淡路町壹丁目 | 巖々堂 |
| 同 日本橋區蠣殼町壹丁目 | 信文堂 |
| 同 同 新葭町 | 良明堂 |
| 同 本鄕區元富士町 | 盛春堂 |
| 同 同 春木町貳丁目 | 解明堂 |
| 大坂心齋橋備後町 | 岡島支店 |
| 堺熊野町 | 高山慶雲堂 |
| 名古屋本町貳丁目 | 石版舍 |
| 信州長野大門町 | 會眞社 |
| 陸中岩手肴町 | 華文舍 |

持主兼印刷人 武田安之助

編輯人 正木政吉

主幹 新保磐次

發行所 成美社

東京本鄕區湯島天神町壹丁目五拾九番地